



ストックホルムセンタ だより 第3号

1. はじめに

6月の中旬より、当「ストックホルムセンターだより」をセンターのHPに掲載し、広くオ・プンにしました。現在、HP: <http://www.jsps-sto.com/news.html> から第1号～第3号にアクセス可能となっております。今後ともお気づきの点や掲載記事のご要望などがございましたら、お気軽にご連絡いただければ幸いです。(土屋)

2. センターの行事

6月16日 第5回コロッキウム「RNAのバイオロジー」の開催



(コロッキウム会場: ホテルエクルンズホフ)

6月15日(火)、北欧最古のウプサラ大学(1477年創設)のあるウプサラのホテル「エクルンズホフ」で、第5回コロッキウム「RNAのバイオロジー」を開催致しました。当センターでは、日本と北欧の若手研究者が議論を深めることにより、当地の先進的な研究動向を探るとともに、日本の研究成果を当地に周知し今後の研究者間の人的ネットワークを形成・拡大することを目的として、平成14年度より「コロッキウム」を実施しており、今回は、4月の「現代日本社会研究」に続き今年度2回目、計5回目の開催となりました。

会場となったホテルエクルンズホフは、かつて士官の宿舎となっていた建物群で、ウプサラの中心部から2キロほど離れた閑静な森の中に位置しています。多少交通の便の問題はありますが集中して学術セミナーを開催するには絶好の環境であり、地元のウプサラ大学ではよく利用しているそうです。



(日本側コーディネーター井上邦夫先生の発表)

コロッキウムでは、冒頭に井上博允当会監事から、ライフサイエンスの分野は日瑞両国にとって戦略的にも大変重要な分野でありその観点からも今回のコロッキウムは時宜を得たものであり活発な議論を期待している旨の挨拶が、続いて6月3日に着任したばかりの岡崎恒子ストックホルム研究連絡センター長から、歓迎の挨拶がありました。



(Coffe Breakは緑がきれいな屋外で)

セッションにおいては、はじめにスウェーデン側のコーディネーターである、Leif Kirsebom先生(ウプサラ大学)から、RNAの研究に関する歴史的概観を含めた導入及び研究発表があった後、日本側コーディネーターの井上邦夫先生(神戸大学)から、今回のスピーカーの選定に当たっては地理的なバランスやトピックの多様性・広がり等を考慮した旨の紹介を含めた研究発表が行われ、これらを含めて計4つのセッションで日瑞各6名計12名から30分ずつ、それぞれの最新の研究発表が行われました。両コーディネーター以外の今回のスピーカーは、日本側は、片岡直行先生(京都大学)、中村輝先生(理化学研究所)、鈴木勉先生(東京大学)、塩見美喜子先生(徳島大学)、尾之内均先生(北海

6月15日(火)、北欧最古のウプサラ大学(1477年創設)のあるウプサラのホテル「エクルンズホフ」で、第5回コロッキウム「RNAのバイオロジー」を開催致しました。当センターでは、日本と北欧の若手研究者が議論を深めることにより、当地の先進的な研究動向を探るとともに、日本の研究成果を当地に周知し今後の研究者間の人的ネットワークを形成・拡大することを目的として、平成14年度より「コロッキウム」を実施しており、今回は、4月の「現代日本社会研究」に続き今年度2回目、計5回目の開催となりました。



(井上監事の冒頭挨拶)



(スウェーデン側コーディネーター、Leif Kirsebom先生の発表)



(木漏れ日が射し小鳥のさえずりが聴こえる会場)

道大学)、スウェーデン側は、Anders Virtanen 先生及び Gerhart Wagner 先生(ウプサラ大学)、Fredrik Soderbom 先生(スウェーデン農業大学)、Marie Ohman 先生(ストックホルム大学)、Mikael Wikstrom 先生(ウメオ大学)です。

会場には、主としてウプサラ大学、ストックホルム大学、カロリンスカ研究所といった近郊の大学から、博士課程学生やポスドク研究者など約 75 名の参加がありました。各発表の後の質疑応答においては、1 人につき平均 4~5 問が飛び交い質問の人数制限をせざるを得ないほど非常に活発な議論が行われ、ほぼ満席となった会場は、終日アカデミックな熱気に包まれていました。

午後の最後の締めくくりは、日瑞双方のアドバイザーからご挨拶をいただきました。スウェーデン側アドバイザーの Leif Isaksson 先生(ストックホルム大学)からは、サイエンスが混沌の状況にある中、今回のコロッキウムは素晴らしかったこと及び基礎科学は社会を支える基盤として非常に需要であるとお話があり、日本側アドバイザーの志村令郎先生(自然科学研究機構長:前 JSPS スtockホルム研究連絡センター長)からは、当コロッキウムの開催の経緯等についての解説を含めた総括が行われました。

コロッキウム終了後は、開催者及びスピーカーによるディナーを開催し、さらに率直な意見交換を行うとともに懇親を深めることができました。



(コロッキウム開催者及びスピーカー)



懇親を深めたディナー
スウェーデン側アドバイザー、Leif Isaksson 先生からの謝辞

今回のコロッキウムは、全体を通してアットホームな雰囲気の中で、テンポの良い発表と充実した質疑応答が繰り広げられ、「若手研究者の討論を重視した研究発表」という当初の目的を十分に達成することができた理想的なコロッキウムとなりました。終了後も、早速スピーカー同士でペーパーの交換が始まっており、今後、当コロッキウムを契機とした新たな学術交流が行われていくことを期待しております。(水田)

6月17日新旧センター長歓迎迎レセプションを開催



(左から Gunnar Oquist 王立科学アカデミー事務総長、岡崎センター長、大塚大使)

6月16日(水)、ストックホルムのシェラトンホテルにおいて、志村令郎前センター長及び岡崎恒子新センター長の歓迎迎レセプションを開催致しました。当日は、Hans Wigzell 前カロリンスカ研究所学長や Gunnar Oquist 王立科学アカデミー事務総長など、大学、対応機関、JSPS フェローシップの同窓会メンバーなど 56 名にお越しいただきました。冒頭に行ったセレモニーでは、井上博允当会幹事から両センター長の紹介を含



(Hans Wigzell 前カロリンスカ研究所学長と志村前センター長)

めた挨拶があり、続いて、志村、岡崎新旧センター長及び大塚清一郎在スウェーデン特命全権大使からの挨拶がありました。次に、当センターの位置するカロリンスカ研究所及びスウェーデンの学術界



(和やかな雰囲気につつまれた会場)

を代表する形で Jan Carlstedt-Duke カロリンスカ研究所研究部長から乾杯の御発声をいただきセレモニーは終了、同時に日本食を中心としたビュッフェ形式の食事の開始となりました。夏至間近のストックホルムは日没が 22 時過ぎとなりますので、会場からは 20 時の終了までメーラレン湖やガムラスタン(オールドタウ



(JSPS Alumni Club in Sweden のメンバーも参加)

ン)を見渡すことができ、常に明るい光に包まれる中で、志村前センター長への感謝の言葉や岡崎新センター長への期待の言葉などが飛び交う、和やかな雰囲気一杯のレセプションとなりました。

今後とも引き続き各方面との連絡・連携を密にしながらセンターの活動を充実していきたいと考えております。(水田)

6月2日 Come With KI to Asia の開催

2004年6月2日(水)カロリンスカ研究所ノーベルフォラムにおいて、カロリンスカ研究所主催、日本学術振興会ストックホルム研究連絡センター、SUN YAT-SEN University (中国)、Agency for Science, Technology and Research (シンガポールの)の共催による Come with KI to Asia が開催されました。これは、カロリンスカ研究所が、研究所内の研究者や学生に、アジア地域の国について学術、文化双方の観点から、関心を高めてもらうことを目的として開催したものです。今回は、日本、中国及びシンガポールの三カ国が対象とされており、それぞれの国とスウェーデンの研究者による講演が行われました。当センターは、日本とスウェーデンの学術交流を活発にすることを目的として、本セミナーを共催しました。



(岡野先生の講演)

冒頭の Prof. Harriet Wallberg Henriksson (カロリンスカ研究所)、Prof. Jan Carlstedt – Duke (カロリンスカ研究所研究部長)の挨拶後、中国の部では、中国の高等教育、今日の中国における学術的経験について、シンガポールの部では、シンガポールのライフサイエンスプログラム、シンガポールで働くカロリンスカ研究所の研究者等について講演が行われました。日本の部では、最初に Jesper Edman 氏 (Stockholm School of Economics)、Christine Dunkle 氏 (Japan Consultant) による「The Japan Experience」の講演が行われました。この発表は、2人の長期間に渡る日本での滞在、交流の経験に基づくもので、スライドによりステレオタイプなイメージ以外の現代日本の多様な文化を紹介するものでした。その後、岡野栄之先生(慶応大学医学部)による幹細胞医学と免疫学分野に関するカロリンスカ研究所との共同研究について発表があり、最後に Prof. Gert Auer 氏より「Cancer Proteomics」に関する



(JSPS 事業紹介の様子)

東京医科大学との共同研究について講演が行われました。また、会場のロビーにブースを設置し、講演前、休憩時間を利用して三カ国の共催機関等の紹介が行われました。当センターは、ポスターの掲示、パンフレットの配布と併せてフェロシップを中心とした JSPS の事業を来場者に紹介しました。スウェーデンにおいて、アジアの学術、文化の情報を入手することは、比較的困難であるため、参加者はこの機会を利用して、熱心に情報収集を行っていました。カロリンスカ研究所内でこのようなイベントを共催したことは、同所内に所在する本センターのプレゼンスを一層高める良い機会となりました。(澤登)

ここで、当センターの所在地であり6月2日(水)、「Come with KI to Asia」の開催地でもある「カロリンスカ研究所」について紹介したいと思います。(土屋)

~カロリンスカ研究所~ ノーベル賞生理学・医学賞の選考機関でスウェーデン唯一の国立医科大学

1810年スウェーデンが対ロシア戦争に敗れ、優秀な軍医の養成所として設立された同研究所は、1861年に学位授与が認められ大学としての地位を獲得し、現在、スウェーデン唯一の国立の医学専門大学として、スウェーデン国内の医学教育の30%、医学研究予算の40%を占めています。同研究所は、世界最高水準を誇る医学研究機関としてだけでなく、1895年のアルフレッド・ノーベルの遺言により、ノーベル賞生理学・医学賞の選考機関になっていることでも世界的に有名で、1901年から100年以上にわたり、同研究所の教授50名で構成されているノーベル賞の選考委員会で選定を行っています。



「ノーベルフォラム」(同研究所の正門入り左手にある建物。毎年10月初旬にノーベル賞生理医学賞の発表が行なわれています。)

メインキャンパスは、ストックホルムの北西に位置する Solna にあり、JSPS スtockホルム研究連絡センターも同敷地内にあります。この他 Huddinge キャンパスと付属病院(カロ



ノーベルフォラムの手前にある「アルフレッド・ノーベルの銅像」

リンスカ病院とダンデリッド病院)があり、2004年に同大学初の女性学

長として着任された Harriet-Wallberg-Henriksson 学長のもとで、細胞レベルの基礎分子生物学から公衆衛生学に至る医学全般について 28 の学科で研究・教育を行っており、約 3500 人のスタッフが働き、約 7000 人の学生が学んでいます。

同研究所では、毎年、12 月 10 日の授賞式の前に、その年のノベル賞受賞者による受賞研究内容の講演会が行なわれているほか、各種の講演会・シンポジウムも数多く開催されており、世界中の著名な研究者との交流がなされています。

また、学生交流や共同研究事業も活発に行なわれており、学生交流においては、Nordplus（北欧諸国対象）や Socrates/Erasmus（EU 諸国対象）、Linnaeus-Palme プログラム（OECD 加盟国でない発展途上国対象）により主として、ヨーロッパ、米国、オーストラリアほか全体で約 600 の留学生（内アジア地域は約 200）を受け入れており、日本とは東京医科歯科大学、大阪大学、山梨大学等と大学間交流協定を結んでいます。共同研究においては、米国、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、シンガポールと二国間交流事業を締結しているほか、近年では、アルゼンチン、チリ、インド、パキスタン、ザンビア、ウガンダといった発展途上国の地域の大学との共同事業も行なうなど、幅広い地域との共同研究がなされています。



（カロリンスカ研究所の敷地内にある JSPS スtockホルム研究センター）

日本とは、大阪大学、理化学研究所ゲノム科学センター、JST（日本科学技術振興機構）と共同研究を行なっています。また、住友製薬と 2000 年 6 月に 5 年間の共同研究契約を締結し、アルツハイマー病の新薬を同研究所アルツハイマー病研究センター（ヨーロッパで最大規模の研究所）で共同開発するなど、同研究所は、近年は医薬品や治療法の開発にも力をいれており、研究成果を事業化する新会社が毎月 1 社の割合で誕生しています。

さらに、同研究所は、2001 年から近隣のストックホルム大学、王立工科大学との共同プロジェクト「ストックホルム・バイオサイエンス」を実施しており、ストックホルム北部の同地域一帯にライフサイエンス分野における世界トップレベルの研究環境を創出し、社会のニーズに応じた産学連携による新事業への参入など、大学が地域発展に貢献するための力強いネットワーク作りを進めています。

この他、同研究所は、EU 委員会の投資プロジェクトのうち、ライフサイエンスや公衆衛生学の分野で多数の国際プロジェクトに参画しております。（土屋）

参考文献:Karolinska Institutet 「Annual Report 2002」

3 . ニュース&トピックス

今月はニュースとして スtockホルム - ウプサラ地域の大学間ネットワーク・プロジェクト、言語に関するものを 2 つ（以上執筆:水田）、トピックとして スウェーデンでの出生率上昇の背景について（執筆:土屋）を取り上げてみました。

<ストックホルム - ウプサラ地域の大学間ネットワーク・プロジェクトが始まる>

6 月 16 日（水）、ストックホルム商科大学、カロリンスカ研究所、王立工科大学、ストックホルム大学、スウェーデン農業大学及びウプサラ大学の 6 大学の学長によって、ストックホルム - ウプサラ大学間ネットワークプロジェクトの開始に関する宣言文に署名がなされました。このネットワークは、個々の大学はもとよりネットワーク全体として国内的・国際的競争力を強化しようとするもので、世界トップレベルの地域間協力によるセンター・オブ・エクセレンス(COE)の創設と言えます。本件は、「オックスフォード、ケンブリッジに続くヨーロッパ第 3 の研究環境の創設」と報じられたり、「スウェーデン版ボストン又はサンフランシスコの創設」と報じられたりもしています。協定大学間の研究者のモビリティも促進されますが、ネットワーク外からの一流の研究者の募集が優先的に扱われるとのことです。Harriet Wallberg-Henriksson カロリンスカ研究所学長は、「我々の目的は、ウプサラ・ストックホルム地域内における、研究者や投資家を惹きつけるような磁石（マグネット）の創設である。」と言っています。

本宣言は、あくまでも当該ネットワークの方向性を示しており、具体的な活動についての言及はあまり見られませんが、以下の 11 の項目が宣言文において短期の行動として列挙されています。今後の動向をさらに追っていききたいと思います。（水田）

参加大学の領域、重要性、ポテンシャルの提示
技術パーク間、特許会社及び持ち株会社間の協力の増加による共通の革新システムの創設
大学が地域発展に協力するための力強いネットワークの創出
投資家や産業界に対する共通の研究ポテンシャルの明確化
共通の国際研究協力の創設
教員及び研究者レベルの更なる協力の促進
共通の研究開発（R&D）投資資金への申請
例えばいわゆるマイナー言語の授業及び研究のように決定的に重要でない活動の調整・統合
ネットワークのプロフィールの立案及び売り込み
内部の団結による取り組み
メディアとのコンタクトを通じたネットワークの周知・普及

（プレスリリース資料、Ny Teknik(新聞)、Svenska dagbladet(新聞)、スウェーデン投資庁ホームページ
（www.isa.se）、ストックホルム大学のニューズレター6月21日号 参照）

<スウェーデン語がフィンランドで必須ではなくなる！>

フィンランドでは、スウェーデン語を母語とする人口が6%であるものの、スウェーデンの支配という歴史的背景もあり、フィンランド語とスウェーデン語の2言語が公用語として法定されています。法定された基準に基づき、自治体ごとに、どちらの言語を用いるか、併用するかについて決定することとされています。

教育についても、中学校及び高等学校においては、フィンランド語を母語とする生徒もスウェーデン語を学ぶことが義務付けられており、国が実施する大学入学資格試験でも必須科目となっていますが、このことについて、6月1日、フィンランド議会は、論争を巻き起こしていた「来年からスウェーデン語を大学入学試験で必須から選択科目とする」という趣旨の同試験改革案を承認しました。この改革案に対する最大の反対勢力であったスウェーデン国民党は、両言語を必須として残すべき旨主張してきましたが、他党からの支持はほとんど得られませんでした。

スウェーデン語を母語とする議員らは、スウェーデン語を同試験において必須から選択とすることにより、大勢のフィンランドを母語とする生徒のスウェーデン語学習に対するモチベーションを低めるとともに、スウェーデン語に関する知識の不足がフィンランドにおけるスウェーデン語によるサービスの低下を招くのではないかと恐れています。さらに、スウェーデン語必須の支持者は、この動きは北欧協力の悪影響を及ぼすであろうと考えているとのことです。（水田）

（北欧理事会及び北欧閣僚会議のホームページ www.norden.org 等参照。）

<国際=英語？>

北欧言語理事会の主催により6月7日及び8日にオスロで開催された「多言語使用に関する会議」において、研究における英語と母国語（北欧言語）とのバランスについての議論が行われました。この会議の背景には、大学が、国際交流、国際共同出版を通じた国際化への要求に直面している一方で、研究環境において北欧言語が用いられなかった場合には文化の構成要素であり社会における議論のツールである北欧言語が崩壊の危機となるのではないかとといった同地域における現状があります。

数人のスピーカーが、英語による研究環境が母国語によるアカデミックな表現能力を低下させるのではないかという危惧を表明しました。前ノルウェーの教育大臣である Gudmund Hernes ユネスコ国際教育研究所長は、「アイデンティティとしての言語」を強調し、各カテゴリーにおける非字母式音声表記（analphabeticism）を避けるために、母国語と外国語を同時使用することを勧めました。

スウェーデンの全国高等教育庁の Torsten Kalvemark 部長は、多くの人が英語によるコミュニケーション能力を過剰評価しており、いくつかの大学では学术论文のコースを提供していることを紹介するとともに、研究にとって共通語は必要不可欠であることを強調しました。引き続き行われた討論では、一人のスピーカーが、共通語は英語である必要はないこと、フランス語やドイツ語が学術的コミュニケーションの代替手段となり得る西欧諸国に比べると、北欧においては英語の地位が高いことについての発言がありました。

スピーカーの一人からは、英語が学生の母国語に替わって講義に使われるようになるまでの過程について、さらなる研究の必要がある旨の意見がありました。

最後の声明には、外国語によって学術の講義を受けることの必要性について、「人が英語で話すことを強制された場合、その人の30%のインテリジェンスを失う」ということが、ユーモラスに例示されています。(水田)

(Nordic Academy for Advanced Study(NorFA)のホームページ www.norfa.no 参照。)

スウェーデンでの出生率上昇の背景～多様なライフスタイルを認めるジェンダ-フリー-な社会～

2003年に戦後最低の合計特殊出生率の1.29ショックを記録し、出生率の低下に歯止めのかからない日本。この背景には、晩婚化だけでなく、非婚化・少産化の進行が大きな要因となっているといわれています。日本の現状は、ドイツやイタリアとともに、「超少子化」と分類され、「超高齢化」が同時に進むことを意味し、年金制度をはじめ、医療、介護など社会保障制度の現状維持が難しくなる危機に直面しています。この10年、政府は小子化対策として育児休業制度や保育所の整備などを進めてきましたが、果たして子育て支援政策だけで十分なのでしょう。

日本と対照的に、ヨーロッパ諸国では出生率が下げ止まりつつあり、最大450日の育児休業期間中に80%の所得保障をする「両親保険制度」を有するスウェーデンでは、合計特殊出生率の回復を2度経験すると共に、2002年には1.65に上昇し、世界中の注目を集めています。実際、街を歩くと、大きなベビ-カ-を押すカップルの姿は至る所でよく見うけられます。この出生率上昇の背景には、1960年代からの行われている女性の社会進出を促すための社会政策の一環として「男女平等」を基礎においた個人単位の「社会保障制度の確立」や、仕事と育児の両立支援を目的とした社会サービス(育児休業制度(最大480日の育児休業期間中に80%の所得保障をする両親保険制度)、児童手当、保育制度)の整備と併せて、注「サムボ」という事実婚など柔軟なカップルのあり方を認めるなど、人々のライフスタイルの面での革新的な政策が取られてきたことにあるといえます。

スウェ-デン社会が目指してきた男女平等とは、性別役割分業「男性=社会活動、女性=家事労働」を否定し、女性も男性も仕事、家庭、社会の活動に対して平等の権利と義務をもつことにありました。1971年の税制改革による、従来の夫婦・家族を基礎的な経済単位とする「夫婦合算式納税方式」から「個人別納税制」へ改正に伴い、女性の社会的・経済的自立が促進され、現在では、社会保障や税金などの社会の諸制度の単位は、すべて「家族」ではなく、「個人」単位化されています。

労働環境においては、短い労働時間(週40時間労働制。残業は税金の関係もあり、原則なし。)、世界初の男女雇用機会均等オンブズマン制度の設置、長期有休休暇(年間最低5週間)と完全消化が整備され、労働時間の短さと有給休暇の長さ、その完全消化を奨励する気風は、男女が共に職場と家庭との役割を分かち合うことを可能にし、女性の社会参加を妨げる婚約・結婚・出産・育児・高齢者介護などの主なハ-ドルについては、高水準の福祉環境、女性環境を整備する過程で、突破されてきています。

女性環境では、1)婚約・結婚でキャリアを中断させないための制度として、姓の継続・選択制度、同棲法(サムボ法)、離婚自己決定権が挙げられます。同棲法はサムボ(事実婚)が1960年代から若い層を中心に増え始め、若者のライフスタイルの一つとして定着する中で法制度の整備が進められ、1976年の「親子法」改正では、サムボカップルに生まれた子供の権利が保障され、「非嫡出子」の用語そのものが差別を生むものとして法律上から削除され、婚外子に対する法的・社会的差別はなく、父母の婚姻関係の有無が子供の法的・社会的地位に影響を及ぼさなくなりました。さらに、1987年に「同棲法(サムボ法)」が成立し、婚姻法と同様にカップルは家事・育児を分担し、家計の支出を負担し合うことなどが定められ、現在では、法律婚とサムボの法的違いは、カップル解消時の財産分割とパ-トナ-の死亡時の遺産相続のみで、結婚と同棲の法的、実質的差がほとんどなくなっています。このような法律的な整備は、スウェ-デンのみならず、事実婚が増えている他のヨーロッパ諸国でも一般的になりつつあります。スウェ-デンでは、最近の新生児で法律婚と婚外子の数がほぼ同数、婚外子の95%がサムボカップルから生まれていて、統計的にも婚外子の方が法律婚より多い年もあるといわれます。このような「婚外子」の差別もなく、多様な人々のライフスタイルを認める環境は出生率の上昇につながっているといえます。

また、2)出産でキャリアを中断させないための制度として、妊娠中の部署異動申告制度、出産・育児休暇制度の充実が挙げられます。1974年に父親の利用を促進するために「両親保険制度」が導入され、最高480日の育児休業期間中に80%の所得保障がされ、そのうち1ヶ月は「パパの月」「ママの月」が設けられ、その月は一方の親に譲り渡せないといわれています。日本の無給、全日・長期の一回の休業に対してスウェ-デンでは、全日休業のほか、4分の1日、半日、4分の3ずつ取得することが出来、かつ子供が8歳になるまでの間に分割して取得ができる等、所得保障の手厚さ、期間の長さや取得方

法の柔軟性の利点により、ほぼ全員が取得しています。また、男性の育児休暇の取得を義務づけることで、男性の意識改革、伝統的な役割分担意識が大きく変化し、現在では、平等なパートナー関係を理想とし、「家事、育児を平等に分担した方がよい」と思っているカップルは多いといわれています。

さらに、3)育児でキャリアを中断させないための制度として、児童看護休暇制度・親保険（子供が病気になった時に子供が12歳になるまで、子供ひとり当たり年間最高60日間の子供看護一時親保険の支給）、労働時間選択・短縮制度（幼児を持つ親は通常の労働時間を4分の3に短縮しても、それを理由に解雇されることはない制度。6時間労働制。）、保育所の整備などが拡充されています。

このようにスウェーデンでは、育児と仕事が両立可能な恵まれた環境の整備と共に、出生率が上昇し、女性の進出が飛躍的に進み、現在、男女平等・女性の社会参画が進んだ国として世界的な定評があり、事実、就学前児童の母親の80%以上が就労し、男性の就労率とほぼ同じレベルに達し、国会における女性議員の占める割合は43%を占め、大臣は約4割が女性で占めています。さらに、個々の人権やセクシャリティの選択性が尊重され、多様なライフスタイルが法的に認められているため、法律婚家族が一般的でなく、サムボ（事実婚）、ひとり親家庭、混合家庭、ホモセクシュアル・カップルの家庭など多様な家族が存在し、性別にとらわれず、誰もが自分らしい生き方を選択できるジェンダフリーな社会が実現されています。

日本では、価値観の多様化や女性の社会進出に伴い、従来の性別役割分担業の支持率が、若い世代で特に20代～30代の女性の間で急速に低下し、結婚後の負担増を敬遠して非婚・晩婚化が進んでいます。また、近年、共働きが一般化され、ライフスタイルの変化や不況に伴い、パートタイムや派遣など非社員の割合が男女とも増加する中、日本の非婚化・少産化を回復するには、ワーク・シェアリングによる長時間労働環境の改善、労働時間の弾力化や育児休業制度の充実が急速に求められています。このほか婚約・結婚・出産・育児・高齢者介護などの女性の社会参加を阻むハードルに対応できる社会的なインフラを整備し、仕事、家庭、社会の活動に対して男性と女性が平等の権利と義務の可能性を広げていく必要があり、「選択的夫婦別姓制度」を認めるなど、性別にとらわれず多様なライフスタイルの選択を認める広義の環境の整備が有効であるといえます。

（土屋）

注 サムボの用語:サムボとは`samboende`という言葉の省略形で`sam`とは「一緒に」「共に」を意味する接頭語で`bo`とは「住む」という動詞。サムボとは「一緒に住むこと」を意味し、婚姻やパートナーシップの法的登録をしないで共同で生活している同棲カップルのことをスウェーデンでは公式に「サムボ」という。

参考文献: 二文字理明、伊藤正純編著「スウェーデンにみる個性重視社会」桜井書店

4. コラム

今月は、都市の紹介として6月15日(火)コロッキウムの開催地で、大学の町として知られる「[ウブサラ](#)」と「[ウブサラ大学](#)」を、文化にまつわるものとして北欧の伝統行事である「[夏至祭\(ミッドサマー\)](#)」について取り上げます。（土屋）

ウブサラ～北欧最古の歴史をもつ大学の町～



（ふたつの尖塔が目印の北欧最大の規模を誇る大聖堂）

大学を中心として栄えてきたスウェーデンの古都ウブサラは、ストックホルムの北70キロメートルに市置し、大学の施設が至るところにあり、学生街らしく、晴れた日の土曜日には河岸で恒例の古本市が開かれ、中世の香りが漂うアカデミックな雰囲気のある町です。大聖堂をはじめ、ウブサラ大学、グスタヴィアナム歴史博物館、ウブサラ城、リンネ植物園など見所も数多くあります。ウブサラのシンボルといえる大聖堂は、118メートルの高さを誇る北欧最大の大聖堂で、1435年にキリスト教の拠点として完成され、現在、聖堂内にはグスタフ・ヴァーサとその二人の后が眠っています。大聖堂の西側には17世紀にグスタフ2世アドルフによりウブサラ大学に寄贈された「グスタヴィアナム」と呼ばれる建物があり、現在は歴史博物館となり、内部にはウブサラ大学の歴史、大学の象徴で「植物分類学」の父と呼ばれるリンネや、水の氷点と沸点との間を100等分する温度計摂氏()の尺度を作ったセルシウスなどの優れた同大学の学者の展示品ほか、最上階には天井ドームが



（解剖実験室:中央で行なわれる解剖がみやすいように、階段が急勾配になっています。）

た「グスタヴィアナム」と呼ばれる建物があり、現在は歴史博物館となり、内部にはウブサラ大学の歴史、大学の象徴で「植物分類学」の父と呼ばれるリンネや、水の氷点と沸点との間を100等分する温度計摂氏()の尺度を作ったセルシウスなどの優れた同大学の学者の展示品ほか、最上階には天井ドームが

あり、かつての「解剖実験室」が現在では一般公開されています。

~ウプサラ大学の紹介~



ウプサラ大学(北欧最古の総合大学)

ウプサラ大学が大聖堂のすぐ近くに設立されたのが 1477 年。当時は大学も教会の支配下におかれており、16 世紀の宗教改革を経て、大学が独自の道を歩み始めたのが 17 世紀。学問好きのグスタフ 2 世が大学を充実させ、医学部の学生として入学したリンネが、植物学の教授になり、「植物の分類学の基礎」を確立したリンネの名と共に同大学は、世界に知られるようになりました。中世に神・哲・法・医学の 4 学部でスタートした北欧最古の同大学は、今では 3 学問分野(学芸・社会科学、医学・薬学、科学技術)、9 学部(神学、人文科学、言語学、法学、社会科学、医学、薬学(スウェーデンで唯一の学部)、工学、自然科学)で 100 学科の幅広いサイエンス分野を包括する高度な研究を遂行する総合大学になり、約 5,800 人のスタ

ッフ(内、教授と研究者は約 3,800 人、女性教授の占める率 15%)が働き、約 35,000 人の学生が学び、その内、博士課程学生は約 3,000 人おり、博士号取得者は年間約 400 以上に及んでいます。学究派の大学としてスウェーデン一の地位を保っており、これまでノベル賞受賞者を 8 名(自然科学分野 6 名、平和賞 2 名)を輩出しています。同大学の研究水準を示すものとして、研究量、質をベ-スにした近年の大学ランキング(調査対象約 2000 大学)において、ヨーロッパの中で第 13 位、世界の中で 59 位になっていることが挙げられます。



ウプサラ大学の図書館(世界でも稀な銀の聖書が保管されています。)

さらに、同大学は、学生交流や研究者交流も積極的で、学生の交流は、す。)

SOCRATES/ERASMUS (EU 諸国対象) ほか TEMPUS、Nordplus (北欧諸国対象)、ALFA、Linnaeus-Palme(OECD 加盟国でない発展途上国対象)協定や二国間協定により、ドイツ、英国、フランス、北欧諸国等のヨーロッパほか、米国、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、中国、南アフリカ等に至る 300 以上の幅広い地域の大学と交流をしています。また、日本との交流も積極的であり、東北大学、京都大学、上智大学等と大学間交流協定を締結しています。現在、同大学は 3600 以上の国際的な共同研究プロジェクトに参画しており、広域の大学間ネットワークにより躍進し続けています。(土屋)

参考文献:Uppsala University「International student guide」2004/2005

スウェーデンの伝統行事

今月は北欧の伝統行事の紹介として「夏至祭(ミッドサマー)」について特集します。

夏至祭はスウェーデンでは 6 月 24 日に一番近い土曜日に定められていて、家族だけでなく、村中で、あるいは隣人と一緒に祝う数少ない祭日のひとつです。この頃の北欧は白夜の溢れるような明るさに包まれ、一面に咲き誇る可憐な青紫や白い草花に野は覆われ、自然のすべてが最も美しい季節といわれています。1 年で最も日の長い夏至を祝う祭は、白夜に繰り広げ



ダ-ラナでの夏至祭



(ダ-ラナでのメイ・ポ-ルの立ち上げの様子)

られる北欧の神話から生まれた幻想的な祭りです。ヨーロッパでは、ゲルマンの習俗、精霊信仰の時代から続いている祭りで、山の上や野原で火を焚いて、1 年で最も力強い太陽、この日を境にして徐々に日中が短くなり、遠く日照を引き留めようという願いが込められた太陽崇拜の儀式でした。今でも、北欧の他の国では焚火を焚いて夏至祭を祝っていますが、スウェーデンでは、火を焚くかわりに、メイ・ポ-ル(新緑の白樺の葉と野の花で飾られた柱)を中央広場に立て、その下で踊る習わしです。とりわけ、スウェーデンでは、心のふるさとしてあるダ-ラナ地方(ストックホルムから北西 200 キロほどに位置するスウェーデン中部の湖沼地帯)やスカンセン(ストックホルムのユ-ル



(スカンセン野外ステ-ジにて:踊りを披露する大人たち)

の下で踊る習わしです。とりわけ、スウェーデンでは、心のふるさとしてあるダ-ラナ地方(ストックホルムから北西 200 キロほどに位置するスウェーデン中部の湖沼地帯)やスカンセン(ストックホルムのユ-ル

ゴ - デン島の一角にある世界最古の野外博物館)で盛大に夏至祭を祝います。

ダ - ラナ地方では、夏至の前夜祭の朝、人々は各々の野原で摘んだ草花を持って各町村、各集落の中心広場に集まり、十字の柱の両端に丸い輪が掛けられている 10~20 メ



(スカンセン中央広場にて:夏至祭を共に楽しむ観客たち)

トルの柱(メイ・ポ - ル)を白樺の枝や野花で飾り、広場の中央に立ちます。柱のこの飾り付けと柱の立ち上げ作業が祝祭のハイライトといわれています。筆者が訪ねたスカンセンでも野外ステージや高台の中央広場などで、メイ・ポ - ルの立ち上がった合図と共に、色鮮やかな民族衣装で着飾った大人や子供がバイオリン弾きの奏でる陽気なスウェ - デンの民族音楽に合わせてメイ・ポ - ルを囲んで、フォ - クソングを歌いながら踊り始めました。あいにく、当日は、踊りの最中に霧雨がちらつく悪天候でしたが、雨が降っているにもかかわらず、広場にはぞくぞくと人々が集まり、やがて観客たちも手を取り合って踊りの輪に入り、その輪はや

がて幾重にもなり、メイ・ポ - ルを中心に大きく広がっていきました。夏至祭を謳歌する人々の歓喜の笑顔がクライマックスを迎え、祝祭の踊りが終わる頃は、空は一条閃光が走り、太陽が顔を出しました。まるで、人々の願いが届いたかのように。



1600年代の農家 Älvros Gården

夏至祭が行なわれたスカンセンは、1891年に造られ、100年以上の歴史をもつ、世界で最古の野外博物館です。創始者のアルトゥール・ハッセリウスは民族学者であり、スウェーデンが他のヨ -



1720年代のセグロ - ラ教会 (毎年6月に古代ゆかしい結婚式が挙げられています)

ロッパ諸国と同様に急激な工業化により古き伝統を失ってゆくのを嘆き、スウェ - デン各地の生活や文化を残そうと各地から約 150 に及ぶ建物や数件の農場

を買い取り、この場所に再現したといわれています。現在では、30万平方メートルの広大な敷地のスカンセンを一巡すると、1600年代の農家、ダ - ラナやスコ - ネ地方の農家、ガラス工房、教会、風車などスウェ - デン各地の歴史的建築物が見られ、内部ではその地方の民族衣装を着けた人々が当時の生活ぶりを実演していて、これらの村で生活する人々を通じて、昔の日常生活や文化を体験でき、古きよき時代へタイムスリップできるようになっています。この他スカンセンでは、ストックホルム雄一の動物園、世界でも珍しい外国産の動物が見られる水族館やチボリ遊園地なども併設されており、伝統行事においては、夏至祭やクリスマスのルシア祭をはじめ一年中おこなわれており、スウェ - デン人にとっては懐かしい心のふるさとのような場所になっています。(土屋)



1850年代のパン屋さん(実演販売されており、焼き立てパンの香りに包まれています)

参考文献「北欧」百瀬 宏・村井誠人監修新潮社

【編集後記】

スウェ - デンでは、7月に入っても比較的涼しい時期が続いておりますが、多くのスウェ - デン人は長期の夏季休暇を取り郊外に出ており、市内は観光客が増え始めています。当センタ - 行事もようやくひと段落がつき、この時期を利用し、同窓会会員へのインタビュー - を実施しています。

(土屋)

監 修: 岡崎 恒子 (ストックホルム研究連絡センタ - 長)

編集長: 水田 功 (ストックホルム研究連絡センタ - 事務官 E-mail:i-mizuta@jsps-sto.com)

編集担当: 土屋 友紀 (研修生 E-mail :gakushin3@jsps-sto.com)

執 筆: 水田 功、土屋 友紀、澤登 ゆり子 (研修生 E-mail:gakushin2@jsps-sto.com)

JSPS Stockholm office Fogdevreten 2, S-171-77 Stockholm, Sweden

TEL +46 ☎ 5088 4561 FAX +46 (0)8 31 38 86 <http://www.jsps-sto.com>